

はしがき

「私が選んでしまった人生だから、仕方ないですよね」、ひとり親家庭のインタビュー調査の際に、溜息と共にある母子家庭の母親がつぶやいた言葉だ。離婚の後、生活の維持のために非正規のダブルワークを掛け持ちする中、懸命に子どもを育てるひとり親に対し、自己責任といった言葉をつぶやかせる社会には、やはり何か根本的な課題がある。育児と仕事を歯を食いしばりつつ行っているひとり親家庭、その困難状況を社会全体が認識し、支え認めあう方向性がなぜ形成できないのだろうか。そのような憤りと疑問が、本書を執筆する契機となった。

本書のタイトルは、「ひとり親家庭はなぜ困窮するのか」である。諸外国と比較し、日本のひとり親家庭の相対的貧困率が際立って高いことは周知の事実であるが、本書はその貧困率自体を分析したものではない。サブタイトルを「戦後福祉法制から権利保障実現を考える」とした通り、本書で課題とするのは、ひとり親家庭が困窮する原因の一端ともいえる日本の福祉サービスの体制のあり方そのものである。その意味で本書は、戦後におけるひとり親家庭の福祉法制からその方向性を明らかにし、なぜひとり親家庭が省みられない社会になっているのか、問題状況自体を解きほぐすことに注力をしたものである。

本書の刊行にあたっては和歌山大学経済学部研究叢書刊行制度からの助成を受けた。さらに本書の研究の一部は、文部科学省科学研究費助成事業（基盤研究（C）21K01969：代表者・金川めぐみ）の成果の一部である。

本書作成にあたっては、さまざまな方々のご支援を賜った。早稲田大学大学院時代の指導教授である久塚純一先生は、筆者が研究者への途に進むにあたっての最初の恩師である。不肖の弟子である筆者に、特に歴史への眼差しと比較という視点を軸に重要な示唆をいつもいただいた。また本書の基礎となった龍谷大学博士論文執筆の際の指導教授である木下秀雄先生には、いつも懇切丁寧な指導していただき、研究を行うことができた。木下先生の「問題意識を明確にしつつ、ダイナミックな論文を書きなさい」との言葉に本書が到達できてい

るか、いささか心配であるが、これまでのご指導に心から感謝申し上げたい。また副査の武井寛先生、寺川史朗先生には、大変有意義なご助言をいただいた。

筆者が大学院生の時代から、事あるごとに励まし支えてくださった古橋エツ子先生、大曾根寛先生の両先生には、感謝の言葉をいくつ並べても足りない。研究手法のみならず研究に対峙する姿勢や心構えを両先生から常に学ばせていただいた。さらに本書執筆過程において支えて下さった、和歌山大学の同僚の先生方にも、心から感謝したい。

また本書の出版にあたり、ご快諾いただき、大変お世話になった法律文化社編集部の中光さんに厚くお礼申し上げる。

いつも仕事仕事で迷惑をかけている家族に、本書を捧げたい。特に娘の薫には、不在がちな母で何かとつらい思いをさせているかもしれない。彼女が大きくなった時に、お母さんはこんな研究をしているんだよ、と本書を手に取り話したいと思う。

最後に、私が今まで行ってきたひとり親家庭のインタビュー調査において、ご協力くださったみなさまにお礼を申し上げたい。筆者の力量不足故、本書そのものには当該インタビューの内容は収録してはいない。前述の通り、本書はあくまでもひとり親家庭に関する法政策の形成過程を検討したものだが、お話して下さった内容やご自身の経験、紡ぎだされる言葉1つひとつが、私にとって執筆の原動力となった。彼ら彼女らにより紡がれた言葉を胸に、ひとり親家庭の父母に焦点が当てられ、ケアを尊重し支えあう社会の構築に至るための一助に、本書が貢献することができれば何よりも嬉しい。

2022年11月

イチョウの葉が舞い散る和歌山市栄谷のキャンパスにて
金川 めぐみ